



調律師 鈴木均が語る

同じホールの同じピアノを日にちを置かずと同じように調律しても、ピアノストによって全く違った、印象的な経験があります。

一人はモーツァルトの演奏で有名だったウィーン出身のイングリット・ヘブラー。全モーツァルトプログラム演奏会では、p、pp、pppといった弱音を弾き分け、まるで「ソフトタッチの神」のようでした。指先の微妙なタッチだけで音のグラデーションを表現し、子どもでも弾けるK545（ピアノソナタ第16番）が水墨画の世界になりました。もう一人は、ロシア出身で天才少年ともてはやされたキーシン。昔は旧共産圏

同じ調律でも違う音色に

から送り込まれた「天才少女」の仕事をよくしましたが、ほとんどの「天才」は12、13歳がピーク。いまだに名が残って活躍しているのはキーシン、バイオリンのレーピン、ベンゲーロフくらいでしょうか。

キーシンが弾いたのはムソルグスキーの「展覧会の絵」で、今度はfff、ff、fの「剛音」の弾き分け。この時ばかりは、強い打鍵で音を狂わされないよう必死でした。大リーグの剛速球のようなタッチなのに音は割れず、音色が変化する。打鍵の技術、筋肉のしなやかさ、伝統のメソッドの裏付けでしょうか。ピアノを弾くことに全人生をかけている印象でした。

リハーサル後に、日本側のマネジャーが「ピアノに注文はあるか？」と聞くと、本人は「いや、とりあえずはノーマルでいい。特別なことはするな」と言ったのが印象的でした。

とかく、調律で「ベートーベン風」「シヨパン風」にしているのかと思われがちですが、それはピアノストの表現のたまものであるり、それぞれ持っている美意識も違います。スタンダードに調律しても、不思議とその人の音に寄ってくるのです。寄りきらない時だけ注文がきます。

次回ももう少しキーシンの話を続けます。

(聞き手・南拡大朗)

1986年のキーシン初来日公演の様子を伝える中日スポーツの紙面

